



上／担い手に配布するTAC通信は月1回程度の発行で、新規作物の栽培提案や病害虫予防について、わかりやすく解説。TACによるメロン栽培日誌を掲載するなど、実体験に基づいた栽培提案をしている。下／右端が市勢課長



TACについての詳しい情報は、JA全農HPのTAC紹介ページまで（<https://www.zennoh.or.jp/tac/index.html>）
JA全農TACフェイスブックページ（<https://www.facebook.com/tac.team.for.agricultural.coordination/>）



TACが担い手農家から頼りにされる要因はここだね！

point1
担い手の声はしっかりと実現する

TACが担い手から受け取った要望はJA内で共有され、改善策に生かされる。農作業の労働力不足を訴える声に応え、今年4月、JA100%出資の農業法人「株JAアグリサポートだいち」を設立。作業支援に加えて、新規就農者の研修も受け入れる。
（写真上はカット野菜工場ベジマルファクトリー。下は深谷さんが常に携帯している面談記録のメモ帳）

point2
相手の立場にたってこまめな対応をする

新規作物を導入する時は、圃場に何度も足を運び、生育状況の確認、消毒の提案などこまめに対応する。ベテラン農家を紹介し、栽培指導をしてもらうことも。TACの提案で、コスト軽減を図るために、昨年から加工用トマトはJAの施設にて育苗している。

JA三重中央

三重県津市南部を管内とするJA三重中央。古くからの米どころで、ブランド米として名高い「一志米」の生産が盛ん。肥沃な土壌と清流に恵まれ、キャベツやブロッコリー、ナバナなど野菜栽培にも力を入れる。TACは30～40代が中心で、3年前から女性TACも活躍している。

イラストは、JA全農TAC推進課と地上編集部とによるコラボキャラクター「TACマン」

また、TACが加工用野菜を栽培するための農業資材を紹介し、JAの栽培研修会も案内する。担い手からの栽培技術面の質問などでTACが答えられないことがあっても、営農指導員や普及

「これまでの延長線上で経営を考えていては未来は見えてきません。だけど、一人で悩んでいてもアイデアはなにも浮かんでこない。これからも、改善策を提案してくれるTACといっしょに、農業者としての可能性をどんどん広げていきたいですね」

「あくまで農家の所得を上げることが目的。加工用野菜は、JAが重量をもとに一定価格で買い取る年間契約なので、収入のめどが立ちやすい。夏場の農作物が少なかつたこともあって、担い手の経営計画にも貢献していると思います」〔市勢課長〕

センターの職員などから情報を得てつなぐなど、しっかりと役割を果たしている。堀山さんも深谷さんの提案で、加工用キャベツの栽培を開始した一人だ。「加工用は規格よりも重さが重視されるため、稲作農家が園芸作物を新規で取り組むきっかけにもなっています」〔深谷さん〕



右から、堀山さんとTACの深谷課長代理。深谷さんも実家は農業を営んでおり、ともにJA青年部に所属する。TACの訪問活動に加えて青年部を通じて、信頼関係を強めている

GO！ 二人三脚で 栽培提案から アフターフォローまで



—— 三重県 JA三重中央

新規就農者へのフォローアップは、TAC（地域農業の担い手に出向くJA担当者）の大切な役割の一つ。JAが自ら運営するカット野菜工場を活用し、栽培提案をして、新規就農者をはじめとした担い手の経営改善につなげている。

JA全農TAC推進課＝企画協力

「初めてのことはばかりで、なにがわからないのかも、わかっていない状態です」と話すのは、農業機械の販売会社を退職し、今年一月に親元就農した三重県津市の堀山浩紀さん（33）。現在は酪農を営む両親のもとで、米と野菜の生産に励んでいる。

そして、農業に挑戦する堀山さんを訪問してサポートしているのが、JA三重中央のTAC・深谷大輔課長代理（40）だ。「いつも圃場まで足を運んでくれ、質問にはなんでも答えてくれます。教えてもらうことすべてが新鮮です」

こう語る堀山さんに、深谷さんも、「これからは営農技術以外にも、農業資材や農薬の選び方、そして、農業者年金、確定申告などで、きつと悩むことがあるでしょう。でも、必要なタイミングでフォローしていきますから、心配しないでください」と、万全のサポートを誓う。

JA三重中央でTACの活動がスタートしたのは六年前。現在は、営農部に所属する四人のTACが、一人当たり七五〇一〇〇軒ほどの担い手農家を訪問している。

「どんな小さなことでもいいから、担い手からJAへの要望を聴きだそうと努力しています。担い手の不満の声から課題を拾い上げて、改善方法を提案し

てきました」

とは、営農部農業支援室TAC担当課長の市勢政人さん（47）。

たとえば、収量が伸び悩んでいた担い手に、TACが土壌分析を提案し、圃場に合った肥料の使用を勧め、経営改善に貢献してきた。四年ほど前には、TACの提案から耕畜連携も実現させた。飼料用稲を栽培する米農家が、収穫した稲わらを牛の餌として地域の酪農家に提供する。TACは訪問先の酪農家から自給飼料が欲しいという要望を聴き、同じく訪問先の飼料用稲を栽培する農家に「国の助成金もあつて収入アップにつながる」とメリットを説明してマッチングした。農業政策にも幅広い情報を持つJAの強みを発揮したかたちだ。

加工用野菜の導入で経営を安定

JA三重中央は、二〇〇六年からカット野菜工場「ベジマルファクトリー」を運営している。ダイコンやハクサイ、ニンジンなど幅広い野菜を扱うが、主力はキャベツで、一日平均約五トをサラダやギョウザの具などに加工する。一年を通じて野菜を確保する必要があるため、TACが担い手へ、キャベツを中心とした加工用野菜の栽培提案を行って

いる。さらに一三年からは、JAが愛知県